ずっと外伝　イシハラ

さいけでりっく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ずっと外伝　イシハラ

【Ｎコード】
Ｎ３１６４Ｈ

【作者名】
さいけでりっく

【あらすじ】
俺の生涯のボス、マイカワマナブに逢う前、俺はどうしようもない人生を送っていた。

外伝１（前書き）

本編『ずっと』
ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ５４８４ｇ／

『ずっと外伝ユイ』
ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ３９２４ｈ／

外伝1

キーボックスに鍵を挿して、ブレーキを握る。エンジンスタートボタンを押すと爆音が轟く。
自分を際立たせたいだけの特攻服に身を包み、集合場所へとバイクを走らせた。特攻服の右腕の
『下克上初代総長』の刺繍が揺れていた。

集合場所の駐車場には３０台近くのバイクと４０人ほどの仲間が居た。
「オス！」
「総長、こんばんわ！」
後輩が俺に挨拶をしてくる。時代遅れもいいところだ。何が『オス』なんだろうか。

「今晩はどこ流すよ？」
「鎌倉、藤沢辺りにすっか？」
「１３４号か。海岸線飛ばすのも悪くないな」
「総長、あの辺りでどっかとぶつかったらケンカになるぜ？」
「ケンカ上等！」

俺がバイクの輪の中に入ると、数十台のバイクがエンジンを止めた。
「今日は１３４号で逗子から鎌倉、藤沢、茅ヶ崎まで流す！マッポ来てもビビるんじゃねえぞ！」
「おお！」
「どっかとぶつかったらケンカだ！下克上は最強だ！行くぞ！」
俺の号令と共に一斉にエンジンを掛けた。耳を貫通するような爆音が鳴り響いた。

土曜の１３４号は暴走族がよく出ていた。俺はそれを知って、このルートを選んだ。俺達を何も規制することが出来ない。人、車、信号、警察までもだ。しかし、先頭を走っていた仲間が俺のところまで戻ってきた。

「総長！蜃気楼とぶつかりました！」

俺は衝突ポイントまで、バイクを飛ばした。

「頭、出て来いや！タイマンで勝負しようぜ！」

下克上、蜃気楼の全てのバイクが、鎌倉海浜公園に入っていった。邪魔が入らないよう入り口を封鎖し、警察が入って来れないよう道路は通行止めにさせた。

「負けた方が傘下に入るってのはどうだ？」

「上等！掛かって来い！」

勝負は一瞬だった。相手の蹴りをかわした俺のカウンターが相手の顎にヒットした。倒れこんだところをたたみ掛けた。

「勘弁してくれ…」

「覚えとけ！俺は下克上の初代総長のイシハラってもんだ！」

いつも目が覚めるのは、昼過ぎ。高校には入ったが、すぐにケンカで退学になった。最初の方は親もぎゃーぎゃー抜かしてたが、１８になった今となっては何も言わなくなった。

「イシハラくーん！持って来ました」

「おう、上って来いよ」

窓から後輩を呼んだ。持って来させたのは金だった。チームのステッカーを売り捌かせた。

「全部で１０万っす」

「ご苦労さん。大島、来月も１０万集めて来いよ」

「は、はい…」
俺はいきなり大島を蹴飛ばした。
「イシハラくん、勘弁してください！」
「うるせえ！大橋、原田…お前らもヤキ入れるか？」
「すいません…」
「お前らは金だけ集めてりゃ良いんだよ！」
「失礼します！」
チームの看板があるんだ。金集めなんか簡単だろう。使えない野郎達だ。

チームの特攻隊長でもある、アキラの家に向かった。
「アキラ、シンナーでも吸うか」
「やることねえしな。吸うべか」
「あれ？この前パクってきたの、もう無えの？」
「ああ、あれ？もう吸っちゃったよ」
「じゃまたパクりに行くか」
「当然！」

俺とアキラは1台のバイクで塗装屋の倉庫に向かった。以前もここで一斗缶を盗んだ。
「今日も誰も居ねえな」
「楽勝だべ」
俺達は、裏にバイクを停めると倉庫の中に入った。真っ暗な倉庫内でライターを灯す。
「2つくらい持って帰るか」
「そうだな。俺とお前の1個ずつな」
「これでしばらくもつな。アキラは空気よりシンナー吸うからな」
「いいべよー」
意気揚々と倉庫を出たときだった。
「警察だ！動くな！」

「警察に動くな、止まれと言われて、逃げない奴は居ないわな」
俺はバイクのエンジンを掛けると、警察の方へバイクを走らせた。
「止まれ！」
「だから止まらないってば」
俺達を包囲していた警察官達が避ける。
「ほい、ケツ乗れ！」
俺達は見事、その場を逃げ切った。その日は朝まで、シンナーを吸い続けていた。

いつも通り昼頃に目が覚めるとビニール袋を握ったまま、眠っていたようだ。
「暇だな…」
バイクに跨って、エンジンを掛けた。ちょうど母親が帰宅したところだった。
「アンタ！仕事も行かないで、一体何…」
ギアをニュートラルに入れたまま、アクセルを回す。母親は俺に説教しているようだが、爆音で
全く聞こえなかった。聞こえない振りをして、そのままバイクを走らせた。

バックミラーで確認すると、母親が泣いているように見えた。

日中は夜の集会と違って、ヘルメットは被っていた。もちろん信号もちゃんと止まった。
「何だありゃ？」
電柱に看板を貼り付けている奴がいる。業者とかではない。スーツを着た、若い男達が何人も
似たような看板を貼り付けていた。
「クラブキング…クィーン…ジャック？トランプじゃねえっての」
それを横目にバイクを飛ばした。

コンビニでタバコを買っていると、大橋からポケットベルが鳴った。
「イシハラくん、俺の先輩が人手に困ってるらしいんですよ」
「何屋？」
「配管屋ですね。俺も原田も大島も誘われてるんすよ」
「日当いくらよ？」
「今から面接に来ないかって言われてるんですけど、イシハラくんも行きます？」
「そうだな。そっち向かうよ」

「バカヤロ！何でヨシアキくんだって言わねえんだ？」
「すいません！」
「何コソコソ喋ってんだ？」
「いえ、何でも無いっす」
このヨシアキくんと言うのは、地元でも怖い先輩のトップ３に入る先輩で、恐ろしくケンカが強い。この頃、噂を聞かないと思ったら、こんな会社をやっていたとは…。
「イシハラは日当７０００円で、お前らは６０００円な」
「は、はあ…」
「何か文句あるか？」
「いえ！」
「明日、ここに５時に集合だ」
「分かりました」

ヨシアキくんの事務所に５時ということは、４時半には家を出なくてはいけない。
「４時起きか…お前ら起きれる？」
「イシハラくんは？」
「起きれる訳ねえだろ！このまま起きてるしかねえ…」

「俺らもそう思ってたところです」
「暇だからシンナーでも吸うか」
「頂きまーす」

俺達は昼くらいに目が覚めるような生活を繰り返していた。ちょっとくらいなら大丈夫だろう。

外伝2

何とか仕事に就くことが出来た俺達は、起きれないと判断するとシンナーを吸っていた。

「イシハラくん！やばいっす！」
「何だよ？」
「もう5時前です！」
「みんな寝ちゃったのかよ！」
俺達は大急ぎでヨシアキくんの家に向かった。5時を10分くらい回ったところだろうか。
「すいません！寝坊しちゃ…」
ガツンという衝撃がこめかみ辺りに走った。次の瞬間、頬にアスファルトが触れていた。大島が目の前で倒れたのが見えると、次々に原田、大橋もヨシアキくんにぶっ飛ばされた。
「今後、一切遅刻はするな！」
「すいません…」
俺達は、ワンボックスの車に乗せられると現場まで向かった。現場では地獄だった。シンナーの吸い過ぎで体力が落ちているのに、この寝不足。ちょっとでも手を抜けば、ぶっ飛ばされる。
大島は、体調が悪くなり嘔吐していた。
「大島！吐いたら仕事戻れよ！」
「はい…」

昼の休憩時間、俺達はヨシアキくんと現場近所の食堂に入った。
「好きなの頼めよ」
「俺、車の中で寝てていいっすか？」

「好きにしろ」
大島は食堂を出て行った。俺達も正直、食欲など無い。朝方までシンナーを吸っていたからだ。

何とかざるそば1人前を食べた。ヨシアキくんは休憩所で昼寝すると言い、俺達は車で話した。
「大島、大丈夫か？」
「気持ち悪いっすね」
「よう、逃げちゃおうか？」
「やってらんないっすよね！」
「やべ！こっち来ました」

俺達は夕方までみっちり、ヨシアキくんに使われた。１８時頃、事務所に帰ってきた。
「お前ら、しばらくは日払いの方がいいんだろ？」
「はい」
あれだけこき使われて、たった７０００万。同じ動きをしていた大橋、原田、大島は６０００円だった。
「明日も同じ現場だから、寝坊すんなよ！」
「はい」

「俺、続けていける自信が無いっす…」
「俺だってそうだよ」
「バックレると探されて、ぶっ飛ばされるんだろうな」
「憂鬱っすね」
俺達は、我慢し続けて仕事に行った。確かにシンナーを吸って、バイクばかり乗っていた。
鈍った体でいきなり肉体労働をしたのだ。ヨシアキくんが怖いということもあって、疲れた。

４ヶ月ほど休まず、ちゃんと仕事に出た。何回かは集会の翌日、行ってはいない学校をネタに
休んだことはあった。ある日、俺達はいきなり呼び出された。
「お前ら、そろそろ払ってくんねえかな？」
「え？何をですか？」
「作業服代、ヘルメット、安全帯、工具代だよ」
「いくらっすか？」
「１人５万だ」
「高くないっすか？」
「カス同然のお前らを使ってやってんだ。仕事続けるなら必要なんだ。これくらい払えよ」
無性に腹が立った。カスとは何だ。しかも使ってやってるって。自分が人手が足りないからと
俺達を呼び出したんじゃなかったのか。

「俺、ちょっとヨシアキくんの下では、やっていけないです。辞めさせてください」
「大橋、何だコラ！面倒見てやってんのに！」
大橋は案の定、ヨシアキくんに殴られた。
「だってヨシアキくんが人手足りないって言ったじゃないすか！」
「口答えすんじゃねえ！」
「理不尽過ぎませんか…？大橋が可哀相っすよ」
大橋を殴っていた手が止まり、ヨシアキくんは俺の方を振り返った。
「何だイシハラまで？あんコラ！」
「今日びのガキだって、もうちょっと稼ぎますよ」
ヨシアキくんが俺の方へ近寄ってくる。

「あああ！」
原田が後ろから、灰皿でヨシアキの後頭部を殴りつけた。俺達は、
一斉にヨシアキくんに殴り

かかった。俺達は一心不乱にヨシアキくんを殴った。
「死んだんじゃねえか…」
「この人は、こんなくらいじゃ死なないっすよ」
「逃げるべよ」
俺達はその場から逃げた。

「イシハラくん、これでパッと行きましょうよ」
「原田、どしたのそれ？」
原田の手には万札が１０数枚、握られていた。
「お前まさか…」
「ヨシアキくんの財布からっす」
「さすがにマズいだろ…」
「風呂入って、キャバクラでも行きましょうよ」
「散々やられた、殴られ賃と今までピンハネされた分ってことでいいじゃないですか」

俺達はその夜、原田のお勧めのキャバクラに行った。
「いらっしゃいませ！何名様でしょう？」
「４人だけど、待つの？」
「少々、お時間を頂戴致しますので、こちらでお待ち頂ければ」
ヒゲ面で腰の低い男がドアを開けると１０数人、すでに待っていた。
「こちらでお待ち頂く分は、無料で飲み放題となっておりますので」
「イシハラくん、待ちましょうよ」
「お前のお勧めなら、待つとするか」
意外と長時間ではなく、１時間も待たずに店内に入った。店内はすごい活気があり、客が満員
だった。女の子のコスチュームはバニーガールだった。
「面白そうな店だな」
「でしょ？」

「いらっしゃいませ！お客様、ご指名はございますか？」
「特に無いよ。可愛いのとキレイどころ付けてよ」
「かしこまりました。すぐに女の子を呼びますので、そこから時間をスタートさせますね」

『マイカワ主任リストまで』

店員の声が店内に響いた。すると俺達の目の前に居た男が手を上げた。
「それでは、少々お待ちください」

「おい、今のが主任だってよ」
「イシハラくんとかと同じくらいじゃないっすか？」
「かもな」
その男は、背がスラっと高く、身なりや髪型、俺達に接する態度がカッコ良く見えた。

「いらっしゃいませ！カズミです、よろしくね」
男が言ったとおり、すぐに女の子達が来た。
「なあ、あの男って何者？」
「マイカワ主任？あの子、まだ１８で入店１ヶ月で主任になったのよ」
「それってすごいの？」
「うちのグループって3店舗あるのね。その中でも若手ではダントツなのよ」
男子スタッフは、グループで社員が２０人ほど居るらしく、アルバイトを含めると３０人ほど居るという話しだった。マイカワ主任という男は、入店１ヶ月で飛び級で昇進し、５人ほど先に入社していた先輩連中を抜いたとのことだった。

「同い年か…」
「お兄さん、主任と同い年なんだ？主任ー！」
「お、おい！」
「カズミさん、何でしょう？」
「お客さんがね、主任と同い年なんだって」
「タメってやつですね。今後ともよろしくどうぞ」
「は、はあ…」
「どうされました？何か嫌なことでもあったかのような顔してますね」
「え？」
「追われているような、怯えているような感じました。今日は忘れるくらい楽しんでください」

何だ、この男は。さっき、一言話しただけなのに。俺の心でも読んだとでもいうのだろうか。

外伝3

俺は後輩の3人とキャバクラに来ていた。そして俺と同い年の18歳の男が、その店の主任だという。これがボスとのファーストコンタクトだった。

「イシハラくん、どうしたんすか？」
俺はマイカワ主任という男を目で追っていた。ちらっと顔色を見ただけで、俺の心の中を覗かれたように、今考えていることを見抜かれたのだった。
「いや、何でもないよ」
「同い年で同性として気になるでしょ？」
「ちょっとね」
「彼は男女問わず人気があるよ。彼の為なら何でもする友達も居れば、惚れてる女の子も居る」
「すごいな…」
「私だって、あんな子は見たことないよ」
「だろうな」
「イシハラくん、ラーメン食って帰りましょうか」
「そうだな」

店を出るとラーメン屋に立ち寄った。
「まだ8万残ってるっすよ」
「みんなで分けちゃおうぜ。ね、イシハラくん」
「…」
「イシハラくん？」
「ん？ああ、そうするべか」
俺はあの男が気になっていた。俺もあの男のようになれるのだろうか。俺は決心した。

翌日の夕方、面接を受けてもらおうと思った。以前、電柱に看板を貼っていたところで誰かが
来るのを待っていた。１８時頃、１人の男が抱えきれないほどの看板を持って歩いてきた。
「あの…すいません！」
「はい？」
「どこの店の方ですか？」
「俺はジャックだけど、アンタ誰？」
「俺、キングで働きたいんですけど、どうしたらいいですか？」
「事務所に次長が来てると思うから、行ってみな」
ジャックの佐藤と名乗る男が、事務所の場所を教えてくれた。

「こんにちわー」
「はい」
「次長はいらっしゃいますか」
「はい、何でしょう？」
昨日行った店で待合室に案内したヒゲ男だ。
「あの…キングで働かせてもらいたいんですけど」
「募集媒体は何を見ました？」
「バイタイ？」
「アルバイト情報誌とか」
「いえ、昨日、客として店に行ったんです。マイカワ主任の下で働きたくて…」
「ほう、マイカワの下ね」
「募集はしてませんか？出来ればマイカワさんと働きたいんです」
「なるほど…実は当グループは、近々新規で店舗を出す予定なんです」
「はい！人手が要るんですか？」
「君は面白そうだから採用しましょう。配属はお約束出来ませんが、

よろしいですか？」
「同じ会社ってことなら…お願いします！」
「じゃ履歴書見せてくれるかな？」
「あ、持って来ませんでした」
「おーい！履歴書１枚持ってきて」
「すいません…」
「君、余程焦ってたんだね」
身なりを整えて、翌日から出勤となった。１８時前には事務所に来るように言われた。

帰宅すると親父とお袋が居た。
「ただいま…」
「お前は一体いつまでフラフラしてるんだ！」
「ちょっとお父さん…」
「俺さ、明日から仕事を真面目にしようと思うんだ」
「何回聞いたことか！」
「黙って聞いてあげて」
「昨日、大橋、原田や大島とキャバクラに飲みに行った」
すごい流行っている店の中心人物が、俺と同じ１８歳だと聞かされた。その男の為にどんなときも
助けてくれる仲間が居る。どんなときも協力している女の子達が居ることを話した。とにかく
じっとしてられない。そいつと張り合ってみたい、一緒に仕事をしてみたい気持ちを伝えた。
「そいつはすごいオーラを持っててさ。酒より女より、そいつをずっと目で追ってたよ」
「そうか」
「道端で従業員を待って、事務所を教えてもらってさ。いきなり面接してくれって頼んだ」
「その顔は受かったんだろ？」

「ああ。でも俺、スーツ来てなかったから、明日から来いって」
「ちょっと待ってろ」
親父はスーツを1着、ネクタイを1本持ってきた。
「俺とお前の体型は同じくらいだから、これ着れるだろう」
スーツに袖を通すとピッタリだった。それは親父が初めて自分で買ったスーツだったという。
「ありがとう。頑張るよ」

翌朝、親父は仕事に行く前に1万円の小遣いをくれた。
「ワイシャツを2枚と靴くらいは買えるだろう」
「親父…これは借りとく。必ず返すから」
「そうか。それは期待して待ってるとするよ。行ってくるぞ」
「いってらっしゃい」
親父に『いってらっしゃい』と言ったのは何年振りだろうか。その背中はすごく大きく見えた。

「おはようございます！」
「イシハラくん、おはよう」
「次長、よろしくお願いします！」
「君の希望通り、配属はキングにしたよ。マイカワの部下になるね」
「ありがとうございます」
「みんな出勤してくる頃だ。キングに行こう」
「はい！」

開店前のキングに行くと照明が明るく、店が狭く見えた。
「おはようございます」
「鷹司支配人、店長は？」
「今日は休みですね」
「主任は？」
「キムラと近藤と、たぶんスカウトです」

「おはようございます！」
マイカワだ。スカウトしたと思われる、女の子と2人で店に入ってきた。バカバカしい話だが
不覚にも奴の姿を見た途端、俺は緊張してしまった。

鷹司支配人から、業務内容について説明を受けていた。しかし俺の視線の先には、マイカワが
居た。昨日とはまた違うオーラを出していた。
「支配人、今日から入店してくれそうです。給料の説明お願いします」
「はいよ」
「主任、新人のイシハラくんだ。面倒見てやってくれ」
「えっと君は…昨日来てなかったかな？」
「はい！よろしくお願いします」
「引き続き、表出てきます！イシハラも一緒に来いよ」
「はい！」

マイカワは何も話さずに、人気の無いところへ俺を連れてきた。
「おい、イシハラとか言ったな？」
「は？」
「今度、シンナーなんか吸って来やがったらボコボコにするからな」
「吸ってないですよ」
「昨日の話しだ」
「あ、はい…」
「俺も薬物は嫌いじゃない。でももういいだろ？俺の下で更正しろ」
「やっぱ、主任も好きなんすか？」
マイカワはいきなり拳で殴りつけた。
「わざわざこんな誰も居ないところで話してんだ。ふざけて喋るんじゃねえ」
「何すんだよ！」

「これくらいでキレてんのか…辞めろ。お前には向いてない」
「辞めてやんよ！」
マイカワに啖呵を切ったとき、親父の背中を思い出した。初めて大きく感じた背中を。
「ああ、勝手に辞めろ。一大決心したようなツラしてても、お前はこんなもんだ」
「くっ！」
「信頼、信用されて男は一人前だ。こんなもんじゃお前を信用や信頼することなんか出来るか」
「どうすりゃいいんだよ！」
「俺を信用しろ。同じ大きさだけお前を信用してやる」

ボスとのセカンドコンタクト。ボスは俺の全てを見抜いていた。俺は誰も信用していなかった。

外伝４

念願のキングに入店した俺。マイカワに連れ出された俺は、いきなり横面を叩かれてしまう。
でもマイカワは分かっていた。俺が孤独だということを。

俺を信用してくれる…。疑心暗鬼だった。俺の周りの人間はいつもそう言った。
「誰も俺のことなんか信用してくれねえ」
「だから俺が信じてやるって言ってるだろう」
「ウソ付け！だから俺も人が信用出来ないんだ」
「お前もつくづく寂しい男だな。男が何かする前に白旗振るのか？」
マイカワは俺に説いた。信用している、されているを気にしている内は、まだ余裕があると。
目の前にある仕事をこなすことで精一杯なのが、普通なのだと。
「どうするんだ？辞めるのか大人しく俺の下に付くか、ハッキリしろ」
「テメエの下に付いてやるよ！」
「だったら言葉遣いに気をつけろ。俺は下は甘くないぞ」

俺は店に戻った。確かにマイカワは手取り足取り、教えてくれた。
営業開始前のスタンバイや
閉店後のスタンバイ。営業中の目張り気配り、ルーチンワーク。マイカワの言うとおりだった。
「主任、すいませんでした。俺が間違ってました。今日は仕事をこなすので一杯でした」
「それが素直な表現というやつだ。俺に詫びを入れられた分、お前は大丈夫だ」
俺はマイカワの言葉が嬉しかった。怒鳴られるかと思ったが、逆に

褒めてくれたのだ。

その日の営業終了後、マイカワはショットバーへ連れて行ってくれた。

「お疲れさん！」

「お疲れさん。マナブ、誰それ？」

「今日から入った、イシハラだよ」

「お疲れ様です。イシハラです。宜しくお願いします」

「コダマとタメかな。キムラの1コ下だよ」

「じゃマナブの2コ上になるのか」

マイカワが2コ下…。コダマとキムラという男達もマイカワにお前呼ばわりで呼び捨てだった。

「イシハラだっけ？このことは内緒にしとけよ」

「あ、はい…」

俺が存在を気にしていたマイカワ主任は年下だったのだ。

「マイカワ先輩を舐めない方がいいぞ」

「ああ。入社が同じ時期なのに、俺らの上司だからな」

マイカワとキムラ、コダマの3人は、お互いに認め合い、切磋琢磨している。3人は仕事の話を夢中になって話していた。俺は3人を良い関係だと思った。

「マスター、チェックして」

「イシハラの分は俺が払うよ」

「あ、すいません」

俺達は明け方になって店を出た。

「お疲れさん。俺達は寮だからよ。気をつけて帰れな」

「ご馳走様でした。お疲れ様です」

「遅刻すんなよ」

「はい」

キング初出勤の長い1日が終わった。俺の中でそれなりの充実感が

あった。

しかしそれは、唐突にやってきた。

５時頃、帰宅すると家の前に大橋、原田、大島が居た。

「どうした？そんなツラ腫らして？」

「イシハラ、待ったぜ」

「ヨシアキくん！」

「話がある。場所替えるか」

俺達は、ヨシアキくんの家に連れて行かれた。

「お前らのやらかしてくれたことよ。どうケジメ付ける？」

「ケジメって…」

「まず同じようにぶっ飛ばさせてもらうわな」

「あ、はい…」

「俺から盗った５０万も返してもらうわな」

「５０万も盗ってないっすよ！」

「間違いなく５０万入ってた。薄れていく意識の中で原田が盗ったところを見てたんだ」

「でも５０万なんて…」

「警察に行くか？お前ら次はネンショウだろ？」

「勘弁してください」

原田が盗ったとはいえ、使ったのは４人だ。原田１人に罪を背負わすことは出来ない。

「ヨシアキくん。分割でもいいっすか？」

「あ？ふざけたこと言ってんじゃねえぞ！」

「１００万を１０回分割で払います。その代わりこれ以上ぶっ飛ばすのは勘弁してやってください」

「イシハラくん！」

「それで勘弁してやるか。イシハラ、約束は守れよ」
「来月の２５日から持って来ます」
「分かった。２５日だな」
「みんな帰ろう」

ヨシアキくんの家を出たとき、すでに朝だった。
「イシハラくん、毎月１０万なんてどうすれば…」
「お前らも働けよ」
「イシハラくんのところは一緒に働けないっすか？」
「お前らまだ１６だろ？水商売だから無理だよ」
すぐにマイカワのことが頭に浮んだ。こいつらと同い年なのかと。
「来月の２５日には、１０万ですよね」
「最初はこのままじゃ、俺達ボコボコにされるんじゃないかなって思ったけど、あの人は金を
　要求してきた。金払って縁を切ろうぜ」
「でもどうやって…」
「バーカ。ハナからお前らなんか当てにしてねえよ」
「え？」
「お前らには金集めさせたり、悪いことをした。これは俺が背負う」
「イシハラくん…」
「今の俺の上司は、お前らとタメ年なんだよ」
俺はマイカワのことを話した。みんなで飲みに行ったときのことや気になる存在となっていた
ことや今日、ぶん殴られたこと。そして俺を信用してくれると言ってくれたことも。
「今まで俺は暴走族の総長やって、その気になってた。それはすごく寂しいことだった」
「そいつと逢って、生まれ変われるなら俺達も変わりたいっす！」
「その時期が来たら紹介する。それまで待ってろ」
「はい！その日が来ることを信じて待ってます」

俺は後輩達を救うことが出来た。初めて仲間になれた気がした。そこに孤独感はなかった。

翌日の営業から、マイカワは厳しかった。日々の営業が終わるといつも殴られていた。もちろん
サボった俺の甘えから叱られていた。出来ないことを挑戦して失敗したとき、マイカワは、逆に
俺のことを褒めた。がむしゃらに働いた。マイカワに褒められたい一心だった。

そんな俺の気持ちをさらに押し上げる出来事があった。初めての月例ミーティング。人事異動が
発令された。次長が言っていた通り、４店舗目が稼動することになった。

「キング店、イシハラ！」

「おい、お前呼ばれてるぞ」

「あ、はい！」

「辞令、キング店ボーイ長昇格を命ずる」

「ありがとうございます！」

次長が辞令を渡すとき、みんなに聞こえないように耳打ちをしてきた。

「マイカワの強い推薦だ。あいつに恥をかかすようなことはするなよ」

「はい！」

入店１ヶ月目で昇格した。厳しいマイカワの教えの中、結果が出た。
それは誰より、マイカワの
推薦だったことが嬉しかった。

俺のマイカワへの気持ちは、憧れから崇拝に変わっていく。俺はマイカワに惚れていた。

外伝5

後輩3人を守る為、金を払うことを約束した。仕事ではマイカワの厳しい教育が続いた。しかし俺の心は折れることはなかった。マイカワが俺をボーイ長への昇格を推してくれたのだった。

次長から社長に代わり、辞令の発令があった。

「キング店、マイカワ！」

「はい！」

「これからは店舗長としてキングを頼むぞ。キング店支配人を命ずる」

従業員からどよめきが起こる。

「マイカワさん、また2段階昇進だぞ」

「すげえな」

マイカワは入社して、メンバーからボーイ長を飛び越して主任になり、主任長を飛び越して、支配人となった。しかもキング店の店長、支配人が抜け、店のトップになったのだった。これでキングのトップが支配人マイカワ　ボーイ長近藤、ボーイ長イシハラ、ボーイヨシタカの4人に数人のアルバイトと、フロントに次長が入る体制となった。

4店舗のエース店の説明があり、ミーティングが終了した。各店に従業員が散らばっていく。

「支配人、これから大変ですね」

「何だイシハラ。ビビってんのか？これからが本番だろうが」

「ビビってなんかないっす」

「俺達の歴史の1ページ目だ。気張れよ！」
「うっす！」
マイカワは『俺達の』と言った。小さいことだが、俺はこれに鼓舞
され奮起した。

このマイカワの一言は、伝説となる営業の序章に過ぎなかった。

マイカワは思い切った改革を行う。店のシステム料金から女の子の
給料システムまで一新すると
いうのだ。普通の一店舗長がここまでの権限はないはずだ。
「イシハラ、俺の草案が通った。来月までに完全にして営業に反映
させるぞ」
「はい！」
この2つのシステム変更は、計算し尽くされた計画だった。客は好
みの女の子を自由に選べる。
サービスＴＡＸ料が付加するのが主流な業界にとって、１万ポッキ
リという明朗会計とした。女の
子の時給も変動性とし、地域でトップクラスの時給を稼げると評判
になった。全ての数値が
アップするという、とてつもない計画だった。マイカワは女の子の
教育に力を入れ、営業力の
強化に努めた。

イメージとは裏腹に店の売上は、低迷することとなった。

俺は支配人とコダマ、キムラと3人がよく集まるショットバーに来
ていた。3人はいつも仕事の
話をしていた。４店舗目のエースの売上がかなりの刺激となってい
るようだった。
「キングはヤバイな」

多々ある問題をマイカワは話した。
「改革は痛みを伴うんだってば」
「浸透するまでに時間掛かるのはしょうがないだろ？」
3人は店休日に息抜きで他店に遊びに行くと話していた。俺はもちろんそれには同行しない。
ヨシアキくんへ金を持って行かなければならなかったからだ。その店休日にマイカワは、運命の出逢いをしていたことを後で知る。ユイさんとの出逢いだ。

支配人の意識が変わり、店は好調な売上へと推移していく。彼の少しの変化で店全体が変わる。
影響力がある証拠だ。これでキングは、一気に地域でナンバーワンとの噂になった。

好転しかけた店に、俺の個人的なトラブルが発生してしまう。
「ボーイ長、お客さんがフロントで呼んでるぞ」
誰だろう。次長が俺を呼びに来た。
「よう！イシハラ、金もらいに来たぜ」
「ヨシアキくん！まだ25日じゃないじゃないですか」
「ちょっと飲みに行く金が無くてよ」
「イシハラ！何やってんだ、戻って来い！」
支配人が俺を呼び戻そうとした。
「すいませんね。ちょっと話があるもんで」
「ちょっと人手が足らないもんで、手短にお願いしたいんですが」
店内に戻ると、特に人手が足らなかった訳ではなかった。支配人は、何かを察したのだろう。
機転を利かせ、俺を呼び戻してくれたのだった。

その日の営業終了後、支配人にショットバーに呼び出された。
「正直に言え。あいつは借金取りか？」

俺はヨシアキくんとの経緯を話した。俺達が我慢の限度を超え、暴行を働いたことや後輩が金を
盗ったことも隠さずに全て話した。
「謂れのねえ銭なのか」
「俺はそう思ってます。でもそうでもしないと後輩がヤキ入れられるんじゃないかって…」
「後輩を助ける為か？」
「意地もありました。こんな奴とは金払って縁を切りたいって」
「そうか。あの野郎のことだ。また必ず来る。俺が間に入ってやる」
「え？」
「金に関しては、ちゃんとお前が筋を通せ。しかしそれ以上は金輪際、関わるなと言ってやる」
「やばい先輩なんですよ」
「だからどうした。お前が後輩を守るのと俺がしようとしていることは、同じじゃないのか」
マイカワは俺の行動を立ててくれた。この人はこれほど、俺のことを信用していてくれたのだ。

「基本給の全て、２０万ずつ返せ。生活は大入りで暮らせ」
「はい」
「鬱陶しい顔を見るのは5回だけで十分だろう。お前が頑張って売上を出せば大入りも増える」
「はい！頑張ります」
胸の奥にあったモヤモヤが全て吹き飛んだ。俺はこの人について行こうと強く思った。支配人は
本当に俺の心の内が読めるような気がした。

店は好調を維持するどころか、過去最高の売上を連日のように叩き出していた。週末に入る
大入りも他店の主任以上のギャラを得ていた。支配人の言うとおり、

俺は２０万を返済した。
「何だ、ずいぶん儲かってるんだな」
「手元に５万しか残ってませんよ」
「まあいいや。じゃ来月も頼むぞ」
札束を数える後姿を蹴飛ばしてやりたかった。しかし支配人の言うとおり、あと４回だ。

ヨシアキくんは支配人の言うとおり、小遣いが無くなると店に来た。
「イシハラは業務中です。何か？」
「俺はあいつに金を貸してるんですよ」
「貸している？私に報告している内容と異なりますね。それは毎月２５日が返済日だと」
「ちょっと入用で金が必要なんですよ」
「奴は奴なりに筋を通している。お帰り頂けますか？」
「また来ますよ」
「営業妨害として訴えを出しましょうか？」
「何だと！」
「私が約束します。イシハラにあと４ヶ月であなたにケジメをつけさせます」
「もし約束を破ったら？」
「あいつは俺の部下だ。もうあなたの後輩ではない。私がケツ持ちしますよ」
「支配人が言うなら信用しますよ。でもあいつはウソは付くし、手癖も悪いですからね」
「周囲に居た人間が宜しくなかったのでは？」
「それじゃ…」

支配人は約束どおり、俺を守ってくれた。その後、ヨシアキくんは店に来ることはなかった。

外伝6

仕事が終わり、俺は家に居た。

今までバイトで色んな仕事をしてきたが、これほど疲れたことはなかった。

金が欲しいから、出世がしたいから仕事を頑張ったのではない。

マイカワに認めてもらいたい一心だった。

支配人は俺に対して、決して特別扱いもせず、甘くはなかった。

当たり前のことを当たり前のように怒ってくれ、また褒めてくれた。

ヤンチャでだらしのなかった俺には、その扱いが嬉しかった。

薬物や暴走族、ケンカ。

光の差してこない、暗闇からマイカワが手を差し伸べてくれた。

朝方に帰宅した俺は、風呂に入るなり死んだように眠った。

最近の俺は、眠れないことが無くなった。

仕事を始めた当初、明るく、雑踏が気になり眠れなかった。

今ではカーテンを閉めなくても、疲れで眠れるくらいだった。

ポケベルの音で目が覚めると、帰宅したのと同じくらい、外が暗かった。

「もしもし」

「イシハラくん、お久しぶりっす」

原田だった。

今から家に来るという。

１０分もしないで、爆音が遠くから聞こえた。

「おう、久しぶりだな。元気か？」

「イシハラくん、聞いたっすよ。２０万ずつ返してるって」
「しょうがねえだろ。それで絶縁できると思ったら安いもんだ」
「いや、何もイシハラくん１人がかぶらなくても…」
「前にも言ったろ？俺もお前らにはひどいことをした。そのツケを払ってる」
「俺らが出来ることってないすか？」
こいつ等は絶対に俺のことを嫌ってると思っていた。
ヨシアキくんから身を挺したこと、金を俺１人がかぶっていることで信用を得たようだ。

「お前ら…変わったな」
「イシハラくんの方が変わったっすよ」
「何か男らしくなったというか」
「マジでカッコ良いですよ」
「例の俺達とタメの上司の存在ですか？」
「ああ。俺はあの人に忠誠を誓って一生涯ついていく」
「そんなすごい野郎なんですか？」
「全てにおいて勝てねえって悟ったよ。モノが違う。それがたまたま年下だっただけだ」
俺のセリフに原田達は、呆然としていた。
確かに自分達と同い年を敬う俺なんて、想像出来ないだろう。

「お前ら働いてんのか？」
「３人セットで塗装屋に行き出しました」
「そうか。シンナーなんか吸うんじゃねえぞ」
「は、はあ…」
「何だまだやってんのか？もうやめろ」
「分かりました」
「ちゃんとやってれば、あの人を紹介してやる」
「はい！」

「お前らもあの人に逢って、変われ」
「それまでに認めてもらえるように頑張ります」
「それは俺も同じだよ」
マイカワと俺の関係に似ていた。

俺はこいつ等の前では、カッコをつけなきゃいけない。
マイカワも俺に対して、同じ気持ちなのだろうか。
ヨシアキくんの件についても、後輩やマイカワに義理を通さなきゃいけない。

しかしそのヨシアキくんが、新たな嫌がらせをしてきた。

「イシハラ、今日は早く帰っていいぞ」
「大丈夫っすよ。どうしたんですか？」
「営業終わった途端、疲れたフリしやがってよ」
「そんなことないですよ。でもせっかくだから上らせてもらいますね」
「おう、しっかり休め」
「はい。お先に失礼します」
店休日の前夜、クタクタになって帰宅した。
支配人は俺のこんな些細なことまで、見てくれている。
確かに疲れ切っていた。

朝方にポケベルが鳴る。
「大橋か？どうした？」
「イシハラくん、アキラくんが…」
「アキラが？どうした？」
「ヨシアキくんとモメて、やられちゃったっすよ」
「今から行く。アキラはどこだ？」

その場に居合わせた、大橋が救急車を呼んだという。
執拗なまでの暴行を受けたらしい。
病院に到着すると、大橋が待っていた。
「イシハラくん！」
「何でモメたんだ？」
ヨシアキくんは、マイカワを調べていたらしい。
「俺らも聞かれたんですよ。あの生意気な野郎は誰だって」
「なぜアキラが？」
「俺らと一緒に呼び出されて、同じこと聞かれてました」
「で、アキラは？」
「真面目になろうとしてる、イシハラくんの邪魔しないでくださいって」
「口答えしたから、やられたのか…」
後輩達だけに留まらず、仲間まで手を出してきた。

俺はキレた。

「初代下克上の復活だ！大橋、メンバー集めろ！」
「はい！」
俺は急いで自宅に帰り、特攻服に着替えた。
「これを着るのもこれで最後だ…」
玄関に行くと、母親が起きてきた。
「アンタ、そんなかっこして、どこ行くのよ？」
「今は言えねえ…」
「ちょっと！」
振り返ると、本音がこぼれた。
「せっかく真面目になれたのによ！」
俺はバイクに跨ると家を飛び出した。
1時間もせずに俺やメンバーは、国道沿いのコンビニに集まった。

「よく集まってくれた！」
「オス！」
「アキラがやられた！ヨシアキをぶっちめに行くからよ！」
「オス！」
「行くぞ！」
一斉にエンジンを掛けると爆音が轟く。
国道に出て、スピードを上げていく。

交差点に差し掛かると、道のど真ん中に人影が見えた。
「支配人！」
そこにマイカワが立っていた。
俺達は、一斉に急ブレーキを掛ける。
右手を上げると、全車エンジンを止めた。
「イシハラ、何してる？」
「なぜここに？」
「質問の答えになってないな」
マイカワがゆっくり俺の方に歩いてくる。
「お前、今ここで何してんだ？」
「仲間のアキラってのが、ヨシアキくんにやられました」
「仕返しか？」
「嫌がらせなんすよ！」
「だからどうした？」
「ボコボコにされて、病院に担ぎ込まれました」
「だから？」
「あいつはやらなきゃ、収まんないっすよ！」
俺の方へ歩み寄るマイカワの前に、大島が出てきた。
「イシハラくん…俺がマイカワさんを呼びました」
「あ？」
「このままじゃ、何かマズイ気がして…」
自分でも分かっていた。

このまま突っ込めば、絶望的な何かが待っていることを。
マイカワからの信頼も無くしてしまうことも。

しかし今までヨシアキくんされた、金集めやヤキ入れの数々。
もうあいつとはこれで終わりにしたいと思った。

外伝7

大島は俺のバイクの前まで来ると土下座した。
「イシハラくん、すいません…」
「テメエ勝手なことしてんじゃねえよ！」
大島を払い除けるようにして、マイカワが俺の目の前に来た。
「お前、俺に返事して無いだろう」
「行かせてください。アキラは俺の仲間なんです！」
「たかが…こんなカス野郎達のてっぺんに立ったからって、それじゃ一緒だろうが！」
「ヨシアキとですか！」
「俺に信じて欲しかったんじゃないのか？」
「もちろんっすよ！だから頑張ってた…」
「お前の決意ってのはそんなもんか！」
俺はバイクから引きずり下ろされた。

「信頼とか信用ってものは、一瞬で崩れるんだ」
「分かってます。全て分かってます！」
「心が折れたのか？俺を信じる心が」
「誓ってそれは折れてません！」
「なら俺を信じろ。こんなバカげたことはやめろ」
拳をもらうより、その言葉が熱かった。
人目をはばからずに、俺は涙をこぼした。
「はい…」
「ここにいる仲間も巻き込むようなマネはするな。全て俺に任せろ」
「お願いします。一矢報いたいんです」
「分かった。仇は取ってやる。それよりみんなを帰せ」
俺はマイカワの言葉を信じ、涙を拭うと立ち上がった。

「下克上解散！」
俺の号令の後、仲間は散って行った。

「すいませんでした…」
「野郎を呼び出せ。今すぐだ」
「え？」
「何でもいい。金が出来たとでも言って呼び出せ」
「は、はい」
「手筈は整ってある」
「え？」

言うとおりに連絡を取ると、翌日の昼に行くとヨシアキは言ってきた。
「イシハラ、待たせちまって済すまねえな」
「これで最後ですよ」
「これはこれは。支配人が用立ててくれたのかい？」
「いえ、あなたがこれで最後だって意味です」
「あ？」
複数の男達がヨシアキを取り囲む。
「恐喝の現行犯で逮捕する」
「ああ！」
「お前には傷害の別件でも聞きたいことがある」
「ハメやがったな！」
「知るか。二度と俺達の前に姿現すんじゃねえよ」
捨て台詞がカッコ良く見えた。

マイカワの作戦でヨシアキと絶縁出来た。
警察と少し話すと、マイカワは俺の方へ来た。
「いいか。金輪際、こんなことで俺の手を焼かすな」
「分かりました」

「俺はお前のことをガキとして見てない。それを理解しろ」
「はい！これかれもお願いします」
頭を下げるとパカンと引っ叩かれた。
「バカヤロ。俺の睡眠時間を返せ」
「営業前に眠気覚まし課って行きます」
「おう、3本くらい寄こせ」
「あはは。別途、具合悪くなっちゃいますよ」

この日を境に俺はマイカワを兄貴と慕うようになった。
この人と一緒に居るだけでいい。
そんな考えを持つようになった。

それからは、余計な心配事も無く、仕事に没頭していた。
毎日クタクタになって、明るくなる頃に帰宅していた。
キングは支配人のシステム改善がようやく浸透してきていた。
売上は格段に上がり、女の子のギャラ、スタッフの大入りも飛躍した。
この結果に俺は、ただただマイカワの手腕に驚くばかりだった。

そしてとある営業終了後、社長の名で緊急ミーティングの招集がかかった。
「エースに集合ですね。支配人以下、スタッフ全員に通達します」
電話を切ると支配人に報告した。
「要点だけ抑えて、残りは明日やろう。みんなエースに行くぞ」
「はい！」

マイカワを先頭にエース店へと出向いた。
店内では、エース店スタッフがスタンバイに追われていた。
「支配人、お疲れ様です！」
「おう、お疲れさん！」

マイカワは威風堂々としていた。
「何だ？社長直々の招集なのに誰も来てないのか？」
「支配人、お疲れさん」
俺達の後ろから部長と次長がやってきた。
「お疲れ様です」
「仕事が出来る出来ないというのは、こういうことを言うんだな」
「キングは最小限の仕事をして、他は明日に回したんだろ？」
「社長の号令です。当たり前のことです」
「この機転が利くというか、気配りというか…ねえ次長」
「判断力の差でしょう。マイカワはいつも単体で考えていない」
部長と次長の話を、少し離れたところで頷きながら聞いていた。

緊急ミーティングが始まるまで、小一時間は要した。
この待ち時間について、部長の説教があったことは言うまでもない。

全員が集まったところで、社長が静かに口を開いた。
「全スタッフに通達する。当たり前のことだが、再度徹底しておく。当グループは薬物の
使用を一切禁ずる。使用が認められた場合には即刻解雇とする。
また全スタッフは女の子
へも徹底するように！以上」
社長はこの一言を言う為に、あえて全スタッフを集めた。みんなはこの意味を理解していた。

「支配人、何かあったんすか？」
「ああ、今度話してやる」
入社した初日にシンナーについて、マイカワに怒られたことがあった。
マイカワはそれらについて、全ての否定はしなかった。
俺も嫌いじゃないと。

しかし、もう辞めろと言われて、ここまで信頼を得てきた。
俺にとっては今更といった感じだった。

キングのスタッフで店に戻ろうとした。
「支配人、飯でも行きますか？コダマは？」
「そうだね、行こうか。イシハラも来るだろ？」
「はい」
「俺は、ちょっと用を足してから行くよ。イシハラ、店に戻って閉めろ」
「分かりました」
マイカワの表情が鋭くなったことに気が付いた。

マイカワはエースを出ると、コンドウを呼び止めた。
そして2人は、俺達と反対方向に歩いていった。
コンドウは俺が入社する前、上司だった男だ。
しかし今は俺に追いつかれ、同じ主任という立場だった。
俺はコンドウなど眼中になかった。
マイカワの期待や信頼に応えるのが精一杯だったからだ。

俺は気づかれないように2人の後を追った。
「お前も気になったのか？」
振り返るとキムラとコダマが居た。
「支配人の顔、尋常じゃなかった…何かあるっすよ」
「俺達もそう思ったよ。ちょっと着けてみるか」
「そうっすね」

角を曲がると、2人は肩を組んで歩いていた。
「あれ？取り越し苦労か？」
「ぽいな」
「いや…支配人が肩を組んで歩くなんてことはしないっすよ」

立ち止まるとマイカワがコンドウを怒鳴った。

外伝8

緊急ミーティングが終わった。
マイカワはコンドウを連れて、俺達と反対方向へと歩き出した。
顔色の変化に気がついた俺は、2人を追った。
俺と同じく、キムラやコダマも様子を見に来た。

マイカワは、いきなりコンドウの腹を殴ったのだ。
「お前、俺のこと舐めてんのか！」
コンドウは両膝を折って、うずくまった。
物陰から飛び出そうとした俺を、キムラとコダマが止めた。
「イシハラ、ちょっと待ってろ」
「支配人には、何か考えがあるはずだ」
確かに2人は何かを話していた。
怒鳴り声が聞こえると、マイカワはさらにコンドウを暴行した。

数分しか経っていないと思われたが、サイレンの音が聞こえてきた。
「マズくないっすか？」
「待ってろ。何かあるはずだ」
俺達の横をパトカーを降りた、2人の警官が走り抜けて行った。

「コラ！何してる！」
うずくまっているコンドウをさらに蹴り出した。
マイカワは警官の制止を振り切って、さらに暴行を続けた。
「そういうことか…」
「え？」
キムラが何かに気がついたようだ。
「俺も支配人の意図が分かったぜ」
コダマもマイカワの真意に気がついたようだった。

「行くか」
「ああ」
「ちょっと！」
俺は慌てて、２人についていった。

「止めないか！逮捕するぞ！」
「お巡りさん。逮捕するのはこの人じゃなくてあいつだよ」
「コンドウ！しばらく別荘でも行って来いや！」
「お前ら…どうしてここに？」
マイカワは、俺達がここに居合わせたことに驚いた様子だった。

「まずはこいつの持ち物検査の方が先だよ」
コダマは警官に事情を話すと、コンドウの持ち物からパケが出てきた。
コンドウはパトカーに乗せられると、車内でパケの中身が覚醒剤だとすぐに分かった。
「４時５５分。覚せい剤所持の現行犯で逮捕する！」
店の同僚でもある、コンドウは俺達の目の前で逮捕されたのだった。

マイカワへの暴行は、捜査協力者として咎められることはなかった。
「お前らだけはやってくれるなよ。なあ？兄弟達…」
その表情は、悔しそうでもあり、悲しげだった。

ミーティングでのコンドウの変化に気がついたマイカワ。
コンドウの所持、使用を確信したのだろう。
それを見過ごすことはしなかったマイカワ。
マイカワは、過去に自分も使用経験があると暴露した。
周囲に精神病院に入れられた奴も居れば、自殺した者も居たのだと話した。

マイカワが社長へ電話で、事後報告をすると俺達は別れた。

そして月例ミーティングの日がやってきた。
グループの店舗スタッフが全て集まり、ノルマの達成の不可や各賞の発表がある。
前月の売上がナンバーワンの店長が、この司会をやることになっていた。
「全員ご起立お願いします！おはようございます！」
もちろん、ダントツでトップを取ったキングの支配人、マイカワが司会だ。
「本日の司会を取り仕切ります、キング店支配人マイカワです！よろしくお願いします」
いつもより凛凛しく見えた支配人マイカワを感慨深げに見ていた。

「各賞や売上発表のその前に…キング店！素晴らしい！これは拍手だ！」
『これは拍手だ』は部長のノリが良いときだ。
「若手のナンバーワンじゃ失礼だな。当グループのナンバーワン店長だよ！」
「部長？私まだ支配人です…」
「もう店長と一緒だよ。いやいやすごい！これは拍手だ！」
この自分達に向けられている拍手は、何度聞いても気分が良いものだ。

「しかしエース店はどうなってんだよ！店長前に出て来い！」
せっかくマイカワのカッコ良い、仕切りが見たかったのに部長のテンションは上がる一方だ。
しかし今日の説教はやたらと長い。
「マイカワに店長の仕事、どうやるか教えてもらうか？ああ？」
部長の煽りは、まさに極上で天下一品だ。

絶対に敵に回したくない1人だと思った。
「お前見てみろよ！イシハラのあの自身に満ちた顔をよ！」
正直ドキっとした。
面倒だった為、部長の小言は聞いていなかったからだ。
「お前は部下にあんな顔させてやれねえだろ！」
データが書かれた書類で、何度も頭を叩かれていた。
まさに厳しいと有名な、ディスカーの朝礼さながらだ。

「これでみんなが納得する訳ないだろう！社長、これは私を含め、ペナルティですよね？」
「先月はキングがすご過ぎた。ダントツで過去最高だろう。マイカワが思い切ったシステム
改革やイベントを打ち出したのが勝因だな。これには脱帽するしかないだろう。クィーン
やジャックも頑張ったってことだな。部長が責任を取るならそうすればいいだろう」

エース店は店長、支配人、管理者である部長が歩合の５０％カットという厳しい裁定となった。
「それでは今月の各賞の発表を次長からお願いします」
「はい。みなさん、おはようございます」
やっとマイカワの仕切りに戻った。
「もう何年も最高売上の更新がされてなかった経緯がある」
キングのことだ。
部長が変わって話をしだした。
「ここで特別賞を発表する。キング店マイカワ支配人！」
「はい」
「今月も頼むぞ。スパースター！これは拍手だ！」
「ありがとうございます。今月も頑張ります」
盛大な拍手の中心にマイカワが居た。

「それでは今月も辞令の交付があります。次長、お願いします」
「それでは、今回は降格人事から発表します」
俺達はどよめいた。
新規グランドオープンしたエースの店長が支配人に降格した。
後任店長は、同店のタカツカサ支配人が昇格となった。
しかし、タカツカサさんの歩合給は支配人給の据置となった。

同じ店で上司と部下だった人間が翌日から、立場が逆転する。
学歴も歳も関係なく、実績のみがこの業界でモノをいう。
そうしてマイカワも成り上がっていったのだ。

タカツカサは辞令交付の挨拶の中で、こんなことを言っていた。
「先日のコンドウのことは、既知だと思います。周知徹底をお願いします。我々の職場や仲間が
　汚されてはいけない。また日々大変だからといって薬物に逃げてはいけない」
彼は、マイカワやキムラ、コダマ達の兄貴分的、存在の男だった。

その言葉は、マイカワと同じような強い信念を感じたのだった。

外伝9

月例ミーティングでエース店の昇降格人事の発表があった。

「続いては、キング店支配人マイカワを同店の店長昇格とする。マイカワは前へ」

「はい」

「同じく、キング店ボーイ長イシハラを同店の主任昇格とする。同じく前へ」

「はい！」

俺とマイカワは、同時に昇格をした。

主任への昇格は、マイカワから事前に内定をもらっていると聞かされていたのだった。

マイカワは、ついに店長まで登り詰めた。

「店長！継続できるように頼んだぞ」

「分かりました」

辞令を受け取ると一礼した。

その日の営業後、店長と両支配人と俺でショットバーに居た。

昇格の祝杯を挙げる…予定だった。

「お疲れさん」

「お疲れ様」

最初の1杯目で乾杯する。

「昇格組で祝杯ですね」

「イシハラも店長の下に居ると出世が早いな」

「期待とプレッシャーは、半端じゃないですよ？」

「期待もしてなければ、プレッシャーもかけた覚えはないぞ」

「またまた」

「勘違いするな。主任までなら誰でもすぐになれるだよ」
「イシハラ、店長の言うとおりだぞ」
逮捕されたコンドウ、店長をスカウトしたサトウ。
2人とも長い期間、主任で燻っている。
キムラ、コダマの両支配人が続ける。
「まずは主任長になって、その次は支配人。目指すは店長だ」
「俺達だって店長や、さらにその上を目指してるんだ」
「俺は出世がどうだとか、考えたことありません」
「え？」
「どういうこと？」
「俺もそう思うよ」
「店長？どういう意味？」
「あくまで異動というのは会社側の判断ですが、俺はマイカワ店長の下で居たいんです」
「こいつは入社するときも、俺の下で働きたいって入ってきてるのよ」
「次長の計らいとエース店の出店話があったからってのもありますけどね」
「そうだったんだ」

確かに会社側の判断で、スタッフの人事異動があれば、従わざるを得ない。
それまでは、店長の下でやりたい気持ちは変わらない。
マイカワは、一店長で納まる器ではない。
彼は必ず、独立するはずだ。
それまでに店を任せてもらうまでの器量を盗み、養いたかった。
その想いや気持ちを3人に伝えた。
「なるほどね。店長の参謀、イシハラはそう読むか」
「不思議とそのレールの上を走ってる感じがするよな」
「楽しみっすよね？」

「コラコラ。お前等の妄想で、勝手に俺の未来予想図を作ってんじゃねえよ」
その楽しい妄想は、コダマの一言で様相を一変させた。
「あのさ…話変わるけど、この頃鷹司さんの様子がこの頃おかしいんだ」
「何だよ？意味深だな」
「タカツカサさん…薬物でもやってんじゃないかなって…」
「は？お前、今日の昇格辞令の聞いてたか？」
「もちろん俺の勘違いであって欲しいよ。でもお前らも気付いただろ？ちょっと痩せたのも
顔色悪いのも、全部アレのせいじゃないかって」
「辻褄が合うってことですか？」
「ああ…」
この場での話は、憶測の域を超えない。
俺を除いた3人は、試す訳ではないが様子を伺うことで一致した。

「お前には話しておく」
「タカツカサさんの件ですか？」
3人はタカツカサさんと飲みに行ったらしい。
「やっぱり…おかしいな」
「店長の目から見てそう思われたなら、何かあるかもしれませんね」
「ああ、そういうことだ」
力が抜けたような溜息をつくと、店長は続けた。
「筋彫りだけどイタズラ書きも入れてたよ」
「イレズミっすか？」
「なぜそれが必要なのかは、俺達は聞けなかったよ」
「そうっすよね…」
リストに次長がやってきた。

「イシハラ主任、ちょっと外してくれ」
「ホールに戻ってろ」
「はい」

「主任リストまで」
しばらくすると次長がフロントへ戻り、俺は店長に呼ばれた。
「はい」
「ちょっと外出する。リスト頼む」
「は、はい…」
「何だ？ヘルプなんか要らないだろ？」
「もちろんです！」
極上の煽りをくれた後、店長は外出した。

「主任、営業大丈夫か？」
次長が店内の様子を見に来た。
「何とかなりますよ」
「俺と部長もちょっと出ちゃうんだよ」
「分かりました」
次長は何やら急いで支度をすると出て行った。

営業を終了しても店長が帰ってくることはなかった。
「お疲れさん」
部長と次長が帰ってきた。
「集計は大丈夫か？」
「ですね。店長は戻りませんか？」
「ああ。ちょっと何時になるか分からん」
「主任は業務が終わったら、上っちゃってくれ」
「分かりました」
店長の周囲で、何かあったことは明白だった。
何かあれば、連絡をくれると思っていたが、その日はこなかった。

「店長、おはようございます！」
「おう…」
翌日、マイカワは普通に出勤してきた。
「おはようございます。店長、昨日何かあったんすか？」
「タカツカサさんの件だ…」
「どうしました？」
「先に部長と次長に報告する」

「はい…」

「すいません。そうさせてもらいます…」
これ以外、電話の内容は聞こえてこなかった。
「イシハラ、今日帰るからよ。部長が来るから営業頼むぞ…」
「は、はい」
朝礼にやってきた次長に聞くも、詳細は教えてもらえなかった。

営業に入ってから間もなくして、1本の電話が鳴った。
「〇〇署の〇〇ですが、マイカワ店長お願いします」
警察からマイカワへの連絡だった。
「本日はお休みを頂いておりますが」
「部長か次長はお願いできますか？」
「お待ちください」

「部長リストまで」

「どうした？」
「〇〇署の〇〇さんからです」
リストのドアを閉めると部長が電話の応対をした。
「病院から失踪？分かりました。署へ参ります」

部長が俺が居ることを忘れて、次長へと連絡を取った。
「次長、タカツカサが病院から失踪したらしい。今から署に行ってくる」
電話を切った部長は、キングを飛び出していった。

タカツカサが病院から失踪？
今回の件は、これだったらしい。
すぐに店長へと連絡を入れた。
「イシハラです。今、部長が警察に向かったんですが、タカツカサさんが…病院から失踪した
　ようです」
「ほっとけ…切るぞ！」
電話は切れた。

店長に一任された営業を全うするしかなかった。

営業が終わってから、店長の自宅へ行ってみようと思った。

外伝１０

「お疲れさん」
「お疲れ様です」
「コダマと店長のマンション行くけど？」
「もちろん行きます」
大至急で集計とスタンバイ、掃除を終わらせて店を閉めた。

「何か買っていくべよ？」
「だな」
「コンビニくらいしかないですかね」
「そうだな」
ビールや缶チューハイ、つまみを山ほど買った。

「イシハラはどの辺りまで聞いてるんだ？」
「直接は説明されてないっすよ」
「俺らもだよ」
「目の前でタカツカサさんが、病院から失踪したって話しか聞いてません」
「そうなのか？」
「警察から連絡があって、部長が次長にそう言ってましたよ」
「一部始終を店長は、知ってるってことだな」
色んな憶測があったが、店長に聞くしかなかった。

インターホンを鳴らすと、マイカワが出てきた。
「おう、お疲れさん。入れよ」
「お疲れさん。どうせ何も飲み食いしてないんだろ？」
「お疲れ。ビールもたんまり買ってきたぜ」
「イシハラも居たのか。まあ入れよ」

「お疲れ様です」
俺達は部屋の中へと入っていった。
「おーユイちゃん、お邪魔するよ」
「飲み物も食い物も買ってきたよ。ユイちゃん今日もキレイだね」
「ありがと、キムラくん。コダマくんとイシハラくんは言ってくれないの？」

みんなで談笑しているうちに、マイカワにも少し笑顔が戻ってきた。
俺達は何かを察したのか、事件には一切触れなかった。
「明日は出て来るんだろ？」
「バカ、今日も出勤してたんだよ」
「店長、最終なんですけど」
「俺が居なかったからって、恥ずかしい数字なんか出してねえだろうな？」
そのとき、インターホンが鳴った。
「誰だよ？こんな時間に」
「私出る。座ってて」
確かに朝の5時をとっくに回っている。

「ユイ？どした？誰だ？」
「警察だって。マイカワさん居ますかって…」
タカツカサさんに関係することであることは、ここに居る全員が明白だった。
インターホンで応対すると、マイカワは玄関のドアを開けた。
2人の私服警官と思われる男達は、警察手帳を見せてきた。
「次長さんでしたっけ？とマイカワさんしか連絡先をお伺いしてなかったもので。名刺の
　番号は留守電で、もう一方とマイカワさんの携帯も電源が入っていなかったものですから」

「店から何があったか、少しは聞いています」
「お話したいことがあるんですが、内容が内容なんでドアを閉めてもいいですか？」
「会社の仲間と彼女が居ますが、玄関の中ならいいですよ」
「事件に関わることなんですが…」
「ここに居る人間はタカツカサの件は知っています。宜しければどうぞ」

「本日２１時４０分、病院からの通報により、病室から失踪したことを確認しました」
「ええ。店から報告の連絡がありました」
「先ほど４時１０分頃、神奈川県にあるゴルフ場が管理する駐車場で、残念ながら遺体となって
　発見されました。死因は一酸化炭素中毒です」
「え？」
俺は頭が真っ白になった。
数日前、エースの店長に昇格したタカツカサさんが死んだ？
警察のその言葉を聞くと、ユイさんがしゃがみ込んでしまった。

「所持品の中に身元を証明する物が無く、パスケースから鷹司という名刺が数枚あることを
　確認しました。おそらく本人かと思われますが、身元確認をマイカワさんにお願いしたい
　のですが？」
「それは俺達じゃよろしくないですか？彼女がこんな状態で１人にしておきたくないんで。
　俺達の会社の上司でもあるんですよ」
「それは構いません。今からお願いできますか？パトカーでお送りします」
確認へはキムラ、コダマの両支配人が行くことになった。

「悪いな。2人とも頼むよ」
「いいって。ユイちゃんの側に居てやってくれ」
「携帯に連絡入れるから、電源入れといてくれ」
「ああ、頼むよ」

「またお伺いしたいことがあるかもしれません。そのときはお願いします」
「分かりました」
両支配人と警察の4人は出て行った。

店長は彼女を抱かかえると、ソファに座らせた。
「イシハラ、こっち来いよ」
「はあ…」

店長は昨日の話をしてくれた。

2日連続で無断欠勤をしていたタカツカサさんの様子を見に行ったこと。
汗びっしょりで倒れて、白目に剥いて泡を吹いていたこと。
それが覚醒剤のオーバードーズだったこと。
一命を取り留めた病院で警察から、体力の回復を待って逮捕すると説明されたこと。

「俺に謝ってきたよ…」
「…」
俺は何も言えずにいた。
「快楽に溺れたってよ！ふざんけんなよって言ってやったよ」
「ですね…」
店長はタバコを燻らせると静かに口を開いた。
「どうしてこうなっちゃったんだろうな…お前らの前でカッコ付け

ていたかったよだってさ…」
余程、悔しかったのだろう。
無念さがとても伝わってきた。

「前にシンナーの件で、俺に怒ったの覚えてます？」
「ああ」
学校の先生や警察ではない、頭ごなしに怒りはしないと言っていた。
「あおのときのセリフ…今になって染みます」
「薬物に溺れる人間の末路ってのは、こんなもんだ」
「はい」
「遊びとして割り切れないと、結果はこうなる」
「はい」
「まだあいつ２５歳だってよ。バカの極地だな」
「惨めっすね…」

マイカワも俺も、ユイさんでさえも沈黙した。

コダマかキムラからだろう。
店長の携帯が鳴った。
「そうか」

「分かった」

「ありがとう。もう帰れるんだろ？気をつけてな」
電話を切ると大きな溜息をついた。
「一酸化炭素中毒で自殺だそうだ」
「やっぱり、自殺でしたか…」
「自殺する前にもう１発、覚醒剤をブっ放してたみたいだ」
「俺が言うのも何ですが…こんなバカ見たことないですね」
「ああ…」

「付き合う人間ってのは、よく見定めないといけませんね」
「夢や目標に向かって走ってれば、そんな余裕はないはずだ」
「はい」
「もし…もしですよ？俺が覚醒剤でおかしくなったらどうします？」
「お前が俺と一緒に居て、そんなもんに手を出したのなら、きっと俺自身を責めるな」
「店長の責任だと、自分を責めるってことですよね」
「俺と居れば、薬物なんか必要ないからだ」
店長マイカワの言うとおりだった。

俺とマイカワには、絶対的な信頼関係がある。
それ以上に何も必要無い。

外伝１１

タカツカサさんの死は、緘口令が敷かれた。

兄貴のように慕った男の死に直面したはずのマイカワは、毅然と営業をした。

精神的には、相当なダメージがあったはずだ。

その姿は、タカツカサからの自立を示しているかのようだった。

もし今の俺が、マイカワという精神的支柱を失ったことを考えると想像を絶する。

俺と店長は、いつものショットバーに2人で来ていた。

「店長…」

「何だ？」

「タカツカサさんのこと、話してもいいですか？」

「構わん」

「タカツカサさんは、店長にとって大切な人だったんですよね？」

「ああ」

「特別だったんですよね？」

「そうだ」

「俺も同じような存在ですか？」

「何が聞きたいんだ？」

「俺は何度も店長に助けてもらってます。俺は店長にとってどれくらいの男なのかなって…」

俺はいきなり頭を叩かれた。

「お前にランクも役どころも何もねえよ」

「まだそのレベルには、達してないってことっすか？」

「お前は、理屈が必要無いところに理屈っぽくなるな」

「ですかね？」

「自分にとって大切な人間ってのは、大切。それだけでいいんだよ」
「はあ…」
「特別な人間ってのも同じだ」
「はい」
「俺を大切に特別な存在だと思っている人間は、俺も同じように思っている。深く考えるな」
「はい」
「別に誰が特別だとかは、本当は無いんだよ」
「え？」
「俺が必要だと言うなら、誰のところにも助けに行く」
「ハードルがありますよね？」
「誰もがって訳にはいかないだろ」
「俺の後輩から連絡あったときは、どう思いました？」
「どうってテメエが主役だったじゃねえか」
「分かりました」
何を言って欲しかったのか、どうでもよくなっていた。
俺を少なくとも必要としてくれているようだった。

マイカワという男は、厳しいだけではなかった。
たまには、ハメを外したり、脱線するのも自分で処理しろと言った。
確かに仕事では、怒鳴られたり、時には殴られたりもする。
しかし、彼は絶対にその場限りで、後々同じ話をしてこない。
もちろんそれらに猛省するが、ストレスは溜まらない。
俺以外の部下も全て同じ想いだと思う。
故に店長マイカワを慕うのであろう。

強力な存在感に、圧倒的な信頼を併せ持つ男。
俺は憧れる男を間違ってなかった。

「もしもし、支配人居るかしら？」

「あ、店長ですね？お待ちください」
話し方は女だが、完全に男の声だった。
「店長、リストまで」
「おう、何だ？」
「お電話です」

「この間のお礼もまだだから、ちょっと顔出しますよ」
営業中ということもあり、手短に電話を切ったようだった。

「イシハラ、今晩は暇か？」
「どっか飲みに連れて行ってくれるんですか？」
「まあそんなとこだ」
「いつでもお供しますよ」
「今日の集計は俺がやる」
「どうかしました？」
「お前でもいいんだけど、遅くてな…」
「そんなことないっすよ」
「俺の倍以上時間掛けて、仕事とは言えないんだけどな…」
「分かりましたよ」
「バカ！すねてんじゃねえよ。出掛けるから早く済ませるだけだ。
他のこと指示しろ」
「はい」

営業が終わり、終礼を済ませると店長はリストに筆もった。
「お疲れ様です。ユカさんやっほー」
「おーユイ！」
ユイさんが店に入ってきた。
店長がリストから、ユカさんに声を掛ける。
「ユカさん、ごめん。仕事終わるまで相手お願い」
「分かったよ」

「イシハラ！」
「はい！」
「もう終わるけど、他は全部終わってんだろうな？」
「すぐ終わります！」
本当に仕事が早くて困る。
「みんなチャッチャ終わらせないと、怒鳴られんぞ！」
「終わらなかったら、お前の陣頭指揮が悪いんだ」
「みんなヤバいぞ！」

何とか怒られずに済むと、俺と店長、ユカさん、ユイさんで出掛けた。
「ユカさんこっちだっけ？」
「ユイは知らないの？」
「2人とも知らないの？」
「どこ行くっすか？」
「蘭三郎ってとこだ」
「俺、知ってますけど？」
「案内しろ」
「いいっすけど、蘭三郎行くんすか？」
「ちょっと義理があってな」
蘭三郎とは、オカマやニューハーフが居る、いわゆる冗談パブだ。
「いらっしゃいませー」
「4人入れる？あとママはいる？」
店長はママに、用事があった雰囲気だった。

ママが来るまで、奥の席に通された。
「イシハラ」
「はい」
「接客をよく見とけ」

「は？はい」

「おはよー」
「ママ、遅いわよ！」
ママは全てのお客に挨拶をすると、俺達に気がついた。
「あら、店長来てたの？後で顔出すわ。ホレ飲んでて」
「嫌だ！ママに顔出すって言われても遠くからでもそんなデカイ顔見えるわよー」
「うるさいわね！このブサイク！」
俺達は大笑いした。

「あら、ユカとユイも居たの？輝きが無いから気がつかなかったわ」
「相変わらずね、ママ」
「ユイはこの前に逢ったから知ってたけど、ユカさんもママと知合いなの？」
「高校の同級生よ」
「同級生なんだ？」
なぜかこのやり取りには、笑いが止まらなかった。
「どうだイシハラ。勉強になったか？」
「新しいジャンルっすね。これがキングで通用するかはどうか…」
「お前なりにアレンジして活かせよ」
「そうっすね」

入れたボトルを全て飲み干すと、チェックを申し出た。
「チェックお願い。あとタクシーを3台頼んでくれない？」
「もう帰るの？まだ5時よ」
「いやみんな明日も仕事だからさ」
「また来なさいよ」
「分かった。また来るよ」
「いくら？私も出すよ」

「いやユカさんは俺らが誘ったからいいよ。イシハラもいい」
「ゴチになります」

下ネタがメインではあるが、客を飽きさせない接客は確かに勉強になった。
店長が言うように、俺なりのアレンジを加える必要はある。
キングの主役は、あくまで女の子なのだ。

俺も店長には及ばないが、客に人気が出てきた。
ヘルプで盛り上げることには、こういうのが使えそうだ。

みんなで楽しんだ蘭三郎だったが、今後、意外な展開に進んでしまう。

外伝１２

「店長、リストまで」
「何だ？」
「蘭三郎のママからです」

蘭三郎に遊びに行った翌日。
営業中にママから店長へと、連絡が入った。

以前、店長に教わったことがある。
店と名前を名乗って、店外で世話になったとき、翌日必ずお礼の連絡を入れる。
今後、その付き合いによって、生産的、建設的な付き合いが出来るかもしれないからだという。
簡単に言えば、顔と名前を売れということらしい。

確かに夜の街を店長と歩けば、同業者は必ず挨拶をしに来る。
そのほとんどが、店長は知らない人間だという。
しかし周囲の他店の人間のほとんどが、店長を知っている。
一個人の店長を知り、キングという店を知る。
やがてそれらが、全てプラスになってくるという話だった。

「よお…今日も来てくれだってさ」
「行きましょうよ」
「金がねえよ。昨日８万も払ったんだぞ」
「ボトル入れなきゃいいでしょ？俺にもたまには出させてください。だから行きましょ」
「分かったよ」
付き合いことは、極力断るなというのも店長の教えだった。

営業が終わると、店長と2人で蘭三郎へと向かった。
「いらっしゃいませ！あら…最近よく逢うわね。ママはまだよ」
「昨日来たべよ？」
俺の突っ込みは、シカトされた。
テーブルへ案内されると、未開封のヘネシーを渡された。
「頼んでないよ？」
「ママからよ。ホレ飲みなさい、飲みなきゃ」
ママは店長が来たら、このボトルを出すようにと話していたという。

しばらくするとママが出勤してきた。
「あら、いらっしゃい。今日は2人なのね」
「ママ、すいませんね。ボトル出してもらって」
「気にしないわよ。ホレ飲んで。飲みなきゃね」

その日も俺と店長は、ドンちゃん騒ぎをした。
「いやー今日は酔っ払ったな。イシハラそろそろ帰るか？チェックしてもらえ」
「お願いしまーす。チェックで」
俺のチェックを聞いたママが、別のテーブルから飛んできた。
「終わったらどっか飲みに行く？」
「いや今夜は酔っ払ったから帰るよ。また来るね」
チェックシートを受け取った俺は、金額に驚いた。
「店長！マズイっす。会計１０万も来ちゃいました…」
「どれ？」
チェックシートを店長に渡した。
「あ？お前よく見ろ。１００００円じゃねえかよ」
「あれ？本当だ。今日はずいぶん安いですね」
店長に頭を叩かれた。
「じゃ約束どおり、今日は俺が」

「やかましいわ。伝票よこせ」
結局、今夜も店長が払ってくれた。

それから、毎晩のようにママからキングに連絡があった。
俺と店長は、２週間の内、店休日以外の毎日、蘭三郎に顔を出した。
最初の２回で、店長が支払った会計は８万。
それ以降、全てママのおごりとなっていた、
店長はそれらを嫌い、支払おうとするもママは受け取らなかった。
「イシハラ、今日は電話が掛かってきても、俺は帰るからな」
「分かりました。俺が電話に出るだろうからうまく言っておきます」

ママからは２１時過ぎに連絡が入った。
「クラブキングです」
「アタシよ」
「イシハラです。昨日はどうもです」
「店長は？」
「ミーティング入ってますね。営業終了後は、幹部会が入ってます」
「あっそ。また連絡するわ」

終礼が終わると、店長がリストに入った。
「集計っすか？俺がやりましょうか？」
「いや早く帰りたいから、今日は俺がやる」
「いつもの時間にママから連絡ありましたよ」
「そうか。ちゃんと断ったか？」
「もちろんっすよ。店長は幹部会でミーティングだと言っておきました」
「付き合いが面倒になってきたな」
「店長。面白けりゃいいじゃないですか」
「じゃお前一人で行って来い」
「そんなこと言わずにー」

俺はその場だけ楽しければ良かった。

店休日に後輩から連絡があった。
「イシハラくん、暇なんで遊びに行っていいですか？」
「別にお前らの顔見たくないけど、いいよ」
「ずいぶん茶目っ気のある言い方じゃないすか？」
「疲れてんだよ」
「じゃ、すぐ行きますね」

遠くの方から、バイクのコールが聞こえた。
まだバイクに乗っているようだ。
俺は自室の窓を開け、やつ等が来るのを待った。
「おう！手前からエンジン止めてくるなんて、大人になったじゃねえか」
「これでも気を使うタイプなんで」
俺に気を使っても、3人乗りで来るようなやつ等だ。
「上って来いよ」
「うっす」

「久しぶりだな。ちゃんと仕事してんのか？」
「前の塗装屋は辞めちゃいましたよ」
「1ヶ月以上はプーっすね」
「どうしようもねえな」
「イシハラくん、キングで働かせてくださいよ」
「俺に言っても無理だ。マイカワさんに認めてもらおうと必死だからな」
「相変わらず厳しそうっすね？」
「主任に上げてもらったけど、まだまだだって言われてる」
「おおお」
「主任になったんすか？」

「店長がゴリ押ししてくれたみたいだぞ」
「でもすごいっすね！」
「マイカワさんには、怒られる方が多いけどな」
「イシハラくんが俺らとタメ年に怒られたりしてるのって、想像出来ないっすよ」
「バカ！怒鳴られたり、殴られたりしてるよ」
「ええ！」
「バカなんて言われるのは、毎日だよ」
確かに店長は大島、原田、大橋と同い年だ。
こいつ等がびっくりするのも無理は無い。
「怒られる以上に可愛がってもらってる」
「よく分かんないっすよ」
「あの人と一緒に居ることは、理屈じゃねえんだよ」
「そうっすか…」
「お前らにはまだまだ分からない話だよ」
後輩達、3人は首を傾げたままだった。

「お前らのこともちゃんと考えてるよ」
「マジっすか？」
「時期を待て。今はそれしか言えねえ」
「はい」
「俺が呼ぶまで、真面目にやってろ」
「分かってます」
「頑張れよ」
「うっす！」
子供を教えるかのようだった。
おそらく店長も俺のことをこのような気分で諭しているのだろう。
立場を置き換えて考えてみると、何ともみっともない。
こいつ等を呼ぶ頃には、俺ももっと信用を得ていないといけない。

俺にとっては、この後輩達も良い刺激となっているのに違いなかった。

外伝13

「店長、リストまで」
「おう、どうした？」
「コダマ支配人からです」
電話の子機を店長に渡した。

「飲みのアポですね？」
「何でそう思う？」
「俺も店長の顔色で概ね分かるようになってきましたから」
「分かったこと言うな」
「しかもいつものショットバーっすね？」
「そうだ。お前も来るか？」
「もちろんボディガードとしてご一緒します」
「お前に守ってもらうほど老けてねえよ」
「あはは。ですね」

営業が終了し、俺は店長とショットバーへ向かった。
「お疲れ様」
「お疲れさん、コダマとキムラはまだか」
「ユイさん、お疲れ様です」
「イシハラくん、お疲れ様」
「マスター、あと2人来るから、上使っていい？」
「どうぞどうぞ。暇な店なもんでどこでも使って」
俺達は2階へと階段を登った。
「今日のマスター、何か自嘲的っすね」
「世間じゃ景気が悪いんだ。この辺りじゃキングくらいだろう。景気が良いのは」
「そうよ。私なんか給料下がっちゃってね」

「イシハラ、下に行ってビール頼んできてよ」
「了解です」

「お疲れ」
「おう、お疲れさん」
キムラやコダマもやってきた。

やはりこの3人が集まると仕事の話だ。
マイカワ率いるキングは、この辺りでもトップクラスの集客と売上を上げていた。
女の子の質や接客もナンバーワンという噂だ。
その店長がまだ18歳と、業界では革命児とかなり有名だった。

俺が店長に出会っとときから、すでに有名人だったが、その噂はさらに加速していた。
俺が惚れて着いて行く男が本物だということと、出会えたことの奇跡に感謝したい。

「この頃、遊びも忙しそうじゃん？」
「ああ。それで困っちゃっててよ」
店長は蘭三郎のママから、執拗なプレゼント攻撃に遭っていると話し出した。

「そっかーそんなことになってたのか」
「コートと時計どうすっかな」
「もらっとけばいいんじゃない？」
キムラとコダマが余りにも簡単に答えを出すと、店長は苦笑いした。
「ユイ、俺イシハラと言って返してくる。どっかのお姉ちゃんならもらっちゃうんだけどな」
「私も一緒に行く。いざとなったら私がママをやっつけるから！」

「ユイ…ケンカしに行くんじゃないから大丈夫だよ。だからついて来なくていいよ」
「マナブくんを守る！私キレたらどうするか分かんないだから。殴り込みよ！」
「分かったけど、刃物は持ってこなくていいからね…」
ユイさんはおそらく本音だろう。
彼女も俺と同じで、マイカワという男を守る為なら、手段を選ばないだろう。
「こんなにお前のこと想ってくれてんだから連れてってあげれば？」
俺達3人は、蘭三郎へと向かった。

「いらっしゃいませー！」
「ママ居るかい？」
「あら、ずいぶん久しぶりね。今ママを呼ぶわ」
久しぶりも何もない。
このところ毎晩のように来ていたのだった。
「ユイと2人で来てるっていうのは、そういうことね」
「ママ、うちの人は優しすぎるのよ。もらった物も悪いから返したいってね」
「それはアタシが夢見させてもらったからプレゼントよ。これからはユイにちゃんと買って
もらいないさい。この子はこれからなんだから。身なりもちゃんとさせないとね」
「分かった」
「ユイが出てきたらしょうがないわ。アンタと揉めようとも思ってないから。」
店長が出る間もなく、ユイさんが話をつけた。

「じゃ、俺達タクシーで帰っちゃうからよ」
「あ、はい。お疲れ様でした」

「お疲れさん」

ママはユイさんの主張を完全に聞き入れた。
ユイさんと揉めるつもりも無いと。
事態は収拾したかに思えた。

営業は、多忙を極めた。
世間では師走。
今まで師走なんか感じたことが無かった。
街はクリスマスシーズンで彩られていた。
人々が忙しなく行き交っていた。
マイカワという男に出会い、飛び込みで面接を受けてから数ヶ月が経過していた。

俺はいつも通り18時出勤し、店のスタンバイをしていた。
「主任、おはようございます」
「おう、おはよう」
店長が認めてくれたおかげで、部下がもう数人居る。
「おはようございます！」
仕事をしていた者が手を止め、座っていた者が起立した。
「おはようございます！店長」
「おう、おはよう」
この人が存在するだけで、店内という空間は別物になる。
「イシハラ、ちょっと来い」
「はい！」
リストの中に2人で入った。

「クリスマスイベントの出勤はどうだ？」
「すいません。俺の力不足でまだ少ないような状態です」
「今、何人だ？」

「言うとぶっ飛ばされそうなんで、期日までに出勤揃えます」
「そう言うなら黙ってるから、頑張れ」
「うっす！」
俺のことを信用していないと出ない台詞だ。
期待に応える為、やる気に拍車が掛かる。
「スタッフミーティングを１０分ほどさせてもらっていいっすか？」
「好きにしろ」
「ありがとうございます」

俺は店長の許可を得、スタッフを集めた。
「みんなの手を止めちゃって悪いな」
「いえ、どうしました？」
「しばらく、今後のシフトにウエイト傾けたくてな」
「いいですよ」
「任せて下さい」
「ありがとう。みんなで協力して良い売上出して、店長に褒められよう」
「了解です！」
「はい！」
スタッフは俺の要望に応えてくれた。
さすが店長の部下だ。
ビジョンが同じ方向を向いている。
俺は出勤調整に力を注ぐことが出来る。

「おはようございます！」
「おはようございまーす！」
いつものように朝礼を始める。
出勤している女の子達と挨拶を交わして、業務連絡を伝えた。
「それでは、店長お願いします」

ここで店長が驚きの発言をすることになる。

外伝１４

「それでは店長、お願いします」

「ほい、みなさんおはようございます！」
店長がフロア中央に歩を進めた。
「今月はみなさんにお願いしている通り大晦日まで営業します。カウントダウンイベントを
実施します。その後は１時間で短縮営業を予定しています。またクリスマスイベントを２日
行いますが、現在のところイシハラ主任がシフトが入っていないと泣きが入っています」
俺は唖然とした。

「その日に出勤してたからといって、男が居ない女とは思ってませんから。必要であれば、
イシハラ主任が土下座もすれば、パンツも脱ぎますので、どうかご協力を」
女の子達から笑みがこぼれる。
俺がシフトに苦悩しているのを見越して、みんなに一言、言ってくれたのだ。
「じゃ、イシハラ締めてくれ」
「はい」
振り向いた店長は、何事もなかったかのようにリストへと向かった。
「これより営業に入ります。お願いします！」
「お願いします！」
「はい！２名様入ります！」
「いらっしゃいませ！」
次長が朝礼が終わるのを待って、口開けの客を入れてきた。

「2名様、2番シートへよろしく」
俺はリストに向かった。
「店長、ありがとうございました」
「あ？ちゃんと結果出すんだろ？途中経過は後で聞く」
「こんな援護射撃してもらったら、意地でも揃えますから」
「分かった。いつまでくっちゃべってんだ。客入ってるぞ」
「うっす！」
厳しくもある店長の教え。
でもなぜかいつもそばに居てくれるだけで安心出来る。
これが本当の包容力というものなのだろう。
優しさというのは、言葉ではない。
店長のキャラからすると、黙って行動を見て覚えろタイプだろう。

客は次から次へと来店してきた。
30分もしないうちに店の半分を客が埋め尽くす。

朝礼に間に合わない時間に出勤してくる女の子にシフトの相談をする。
「24と25シフト入れてよ」
「もうちょっと待って。来れそうなら言うから」
「まだ足りてないから、出来たら協力頼むね」
店長の援護射撃があったのにも関わらず、結果が出ない。

「店長、明日休んでいい？」
「明日は…大丈夫だな。いいよ」
「急ですいません」
「24と25は？」
「忙しくて来れないかも？」
「男居るようなフリすんなよ。はい出勤ね」

「ちょっと待ってよー」
「俺に貸しを作っとくと、高金利で戻りがあるぞ」
「じゃ貸しとく」
「助かったよ。じゃ頼むな」
あっさり出勤を取っていた。

それを見ていた俺とアルバイト。
「店長、うまいっすね」
「だな」
「駆け引きしてるようには見えないんですけどね」
「女の子も自然で無理してなさそうに見えるよな」
「主任もバックアップするから、頑張ってください」
「ああ。分かった！」
結局、その日は営業が忙しく、シフトを増やすことは出来なかった。

終礼が終わると、俺を含めたスタッフがクタクタになっていた。
「コラ立て！疲れてんのはお前らだけじゃないんだぞ」
「はい！」
俺達を怒鳴りつけると、店長はリストへ集計作業に戻った。
「イシハラ！」
「はい！」
「送りの段取りしたのか？」
「はい。今日は3人だけで着替えたらジャックに移動です」
「おう、ちょっと来い」
「はい」
リストへと向かう。

「残ってる男と女で飯食いに行くか、人数確認しろ」
「は、はい」
連日の多忙で売上は上っているが、心身疲れ切っていた。

スタッフ連中は、疲労困憊。
女の子達も疲れているだろう。
「店長がご飯連れてってくれるって。行く人？」
「行く！」
「はーい！」
「イチ、ニ、サン…店長、女の子６人の野郎が全員です」
「じゃ早く仕事終わらせろ」
「はい！」

店内の掃除とスタンバイ、発注を急ぐ。
「私達も手伝ってあげるよ」
「おお、ありがとう！」
「じゃ私も」
「助かります」
女の子達が、俺達の仕事を手伝ってくれたおかげで、早く店を閉めれた。

「じゃ行くか。焼肉辺りでいいか？」
「何でもいい！」
「俺達もどこでもいいです」
行き付けのショットバーの近所にある、新規オープンした焼肉屋へと向かった。

「いらっしゃい！」
「たっちゃん。まいど！」
「お！店長！」
俺達も女の子達も店主のことを知っていた。
「主任にみんなまで！」
店主はキングの常連客の１人だった。

「美味いもん食わせてよ」
「あいよ！奥の座敷使ってよ」
「みんな先に行ってろ」
「はーい」
俺は座敷に行かず、トイレに寄った。

「店長いいって！」
「何水臭いこと言ってんのよ？気持ちしか入ってないから」
「すいません！頂いておきます」
「とりあえずオーダーしないから、お勧め持ってきてよ」
「あいよ！大至急持っていくよ」

「店長」
「何だ？」
「祝儀ですか？」
「見てたのか？んま、そんなもんだ」
「ギブアンドテイクですね」
「これは俺個人的な気持ちの問題だ」
「そうなんすか」
「今日、少ししたら先に帰るからよ」
「え？」
「俺抜きでコミュニケーション取るようにしてみろ」
「は、はい」

キングの常連客でもあるたっちゃんは、良い部位の肉を持ってきてくれた。
飲み物も幅広いジャンルで品揃えてあり、焼肉屋にバーを合わせたような感じだった。
「お疲れさん」
「頂きます！」

店長の乾杯でスタートした。
「今年ももうちょっとだな」
「っすね」
「みんな稼げてるか？」
店長は女の子達に問い掛けた。
「おかげさまで」
「お前らは？」
「キングで働けてることに感謝してます」
「稼げないとつまらないからな。稼げるような場所は俺が作る」
「はい」
いくらお酒の席だとしても、ここはみんな真面目に聞き入る。
「あとは個々の努力だ」
「はい！」
そしてまた、談笑の時間に戻った。
「店長、正月休みっていつまで？」
「1～5日まで」
「店長とかどっか行くの？」
「みんなでスキー旅行」
「主任は？」
「そのスキー旅行誘ってもらってないから、ゴロゴロする予定」
「皮肉っぽく言うな」
「だって…」
「コダマもキムラも部下は連れて来ないんだ」
「そうなんすか」
2時間くらい経った頃だろうか。
「イシハラ、ちょっと来い」
「はい」
座敷の襖を閉めた。

「これで帰るからよ。後頼んだぞ」
「はい」
「みんなには、気がつくまで帰ったって言わなくていいから」
「分かりました」
店主と一言二言話すと、店長は帰って行った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3164h/

ずっと外伝　イシハラ

2010年10月10日12時32分発行